

現場での1年を振り返って 有限責任監査法人トーマツ 福井連絡事務所 上原 久和

私は平成19年3月にアカウンティングスクールを修了後、翌年の会計士試験を経て平成20年9月より現在の職場で勤務しております。よって、現場に出始めて約1年ほど経過し、漸く年間を通じての監査の流れを把握できるようになってきたところです。

私の場合、この1年ほどで製造業、小売業、学校法人など約10社ほどの会社に行きましたが、年間を通じて担当している会社は5社ほどです。金商法適用会社もあれば、会社法単独適用の会社など種類も様々ですが、スタッフレベルで担当する科目の監査においてはそれほど業務に大きな差異は感じておりません。(注記等の開示内容が異なることから多少の差異はありますが…)

それよりは個々の会社毎に業務内容や仕事の手順(内部統制など)を理解し、担当科目の金額(数値)の妥当性や合理性を判断していくことの難しさを日々感じております。

最終的には主任や担当社員が判断することでも、まず担当者として自分自身はその兆候や原因を把握・理解しなければ虚偽表示を見逃してしまうこととなりますので非常に責任重大です。その一方で監査は責任重大であるからこそ、やりがいも感じられる業務だと思います。

今後、IFRSが導入されれば単に基準に従って会計処理を判断するだけではなく、基準や会計理論の考え方から判断する場面が今まで以上に増えるかと思えます。そのためにも専門家として今まで以上に勉強しなければと感じる今日この頃です。

**関学AS自治体会計コースを修了して** 西宮市 文化まちづくり部 山本 晶子

市役所に入所して20年以上が過ぎ、業務の複雑・高度化に対応する知識の必要性を痛感していたことから、関学ASに入学し、2009年3月に修了しました。仕事と家庭、学業との鼎立に苦慮しましたが、自ら学ぶ楽しさを実感した学生生活でした。また第一線で活躍されている教員の方々や、多様な職種の学友との出会いと交流は私にとって一生の財産になりました。関学ASでは専門的な会計学はもとより、自治体の会計、財政、行政経営、監査なども学ぶことが出来ました。私は市の文化まちづくり部に所属し、文化、芸術、生涯学習等の業務を所管していますが、修了後は今までよりも広い視野で業務を捉えられるようになりました。文化事業は成果の可視化が難しい分野ですが、限られた行政経営資源を適正に配分するために、事業毎にPDCAサイクルでの見直しを実践しています。



今、自治体では地方分権型社会が進む中で、いかに自立的で活力あるまちづくりを進めていくかが大きな課題となっています。NPMによる行政改革が行われ、文化施設や事業でも民間へのアウトソーシングが進んでいます。しかし、民間活力の導入は地域の特性に合わせた各自治体の創意工夫が必要であり、市民ニーズに的確に対応するために公民のパートナーシップの構築が必要です。そのためには、各種制度の基礎的な知識や背景などを知った上で、高度な政策立案と決定を行う自治体職員の経営管理能力が求められています。

今後も関学ASで学んだことを基礎として更に学習を積み、自治体経営や財政運営での実務に活かしていきたいと思っています。